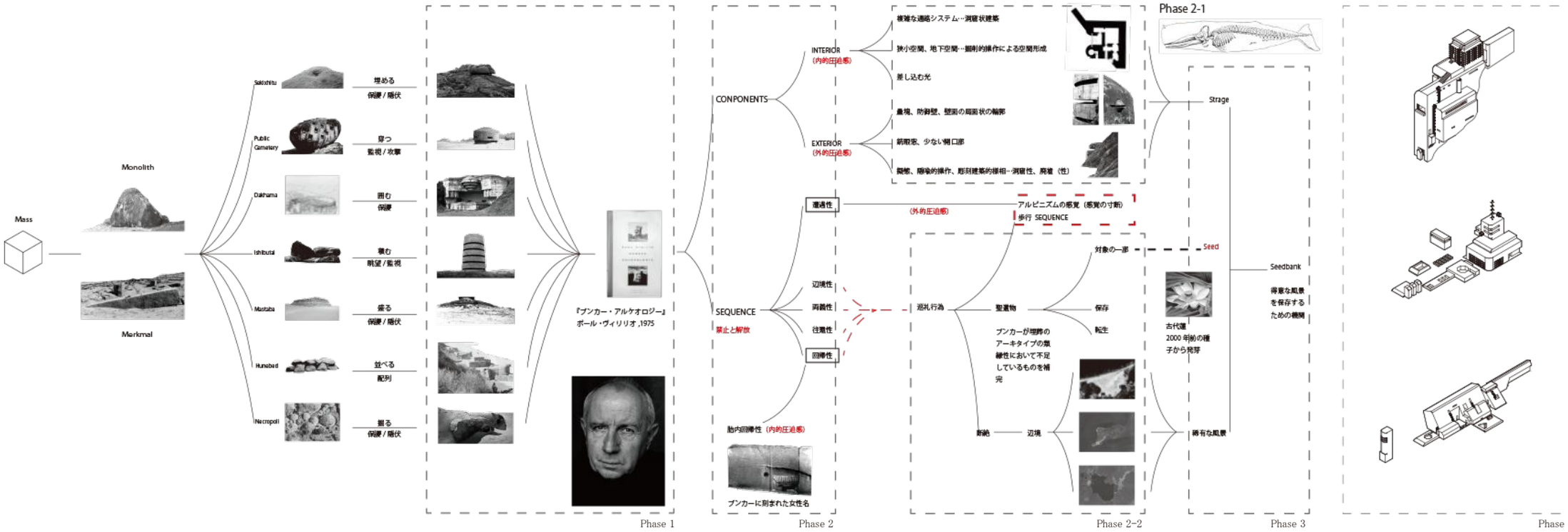



# 自己切断の時代における回帰のメルクマール
# 或は、 姿を消した種族の抜け殻

-地理多様性の保存と、 身体と世界の再物質化をもたらすもの-

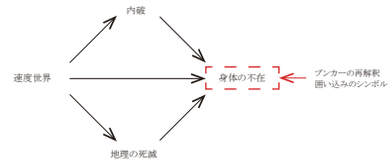
要塞は単に攻撃不可能なものとして描かれているだけではない。 力に満ちたもの、 光を放つものとしても描かれている。 要塞は遠く紙片の操を乗り越え、 はるかな未知のものへと力を及ぼす。 自分自身の生活は高々とのこぎり壁で護られ、 ふちどられていた。 しかし、 眺望の為にはいつでもそこに登ることができた。 この狭い場所と美しい異郷との結びつきは後々までも消えることがない。

希望の原理 , 隠れ場と美しい異郷
エルンスト・ブロッホ

## 1 概要

フランスの思想家 P・ヴィリリオは、 現代という速度世界の革新のもとで地理の死滅という身体と世界との間を媒介する地平の喪失を訴え、 危惧の念を示す。 物質世界はスムーズな運動を生産するヴァーチャルな機能平面上の世界に置き換えられ、 それにより我々の身体は浮遊を象徴する亡霊かのように都市を彷徨する。 生活はこの機能平面上で即物的な対象となり、 本来の生活様態は解体される。 我々は、 非物質的で幽霊的な現前のために物質世界が凋落する瞬間を無視しえないであろう。 ここに固有の身体の喪失をみるヴィリリオは、 触覚の回復、 歩行、 アルピニズムの感触を再び見出す必要性に駆られる。 そして、 それらの回復は物理への回帰であり、 何らかの物質の回帰の印であり、 身体と世界の再物質化であるとしている。 住むとは、 あるいは建築と対峙するとはどのようなことであっただろうか。 また、 こうした我々の生の希薄化、 想像力との乖離を敏感に感じとるものは都市の中を彷徨い、 そしてどこへたどり着くのであろうか。

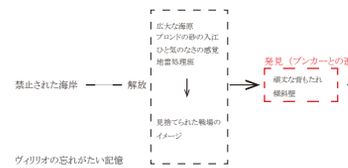
ここに、ヴィリリオのブンカー体験に基づき、「何らかへと回帰するための巡礼行為のプロトタイプ」の生成及び、 ブンカー研究に基づくアーキタイプの抽出・更新を行ない、 足を持たぬ者の帰還の場所、 身体の回復の場所として、 散歩者・彷徨者・巡礼者が目指す都市郊外の異他なる場所、 または辺境における象徴的な空間装置を計画する。 また、 環境モデルにおける地理多様性、 植物学からの着想とヴィリリオ哲学が提言する建築構造的に推奨されるブンカーというシェルター、 またはそこから類推される地下墳墓など埋葬のアーキタイプ的構造を併せ持つ、 種子銀行を用途の要とした植物学と保存（仮死状態）にまつわる風景保全施設の提案をおこなう。

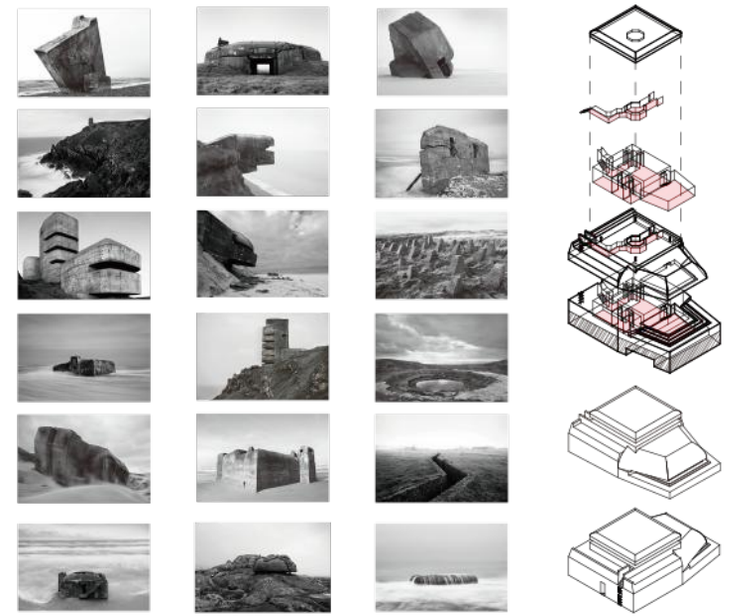



## 2 ブンカーとの遭遇

P・ヴィリリオは 1945 年の夏、 第二次世界大戦の際に構築された海岸防衛線に打ち捨てられたままとなっていたコンクリート塊のブンカーに遭遇する。 そして、 その塊との一瞬の対峙のうちに、「内的にも外的にも押しつぶされそうになる感覚」を感じとったという。 その内部には砂丘の砂が侵入し、 居場所の狭さは床を覆う砂の厚さによってさらに強調されていたのであった。 その空間は通常の運動、 身体の現実的な可動のためにはあまりにも小さく、 それは建物全体がずっしりと身体に覆い被さるかの様な重さを与えてもいた。 それ故、 体験するものを半痙攣の状態によって身動きがとれなくさせる傾向にあると語る。 こうしたブンカーとの遭遇を振り返り、 彼はこのコンクリート塊と埋葬のアーキタイプとの相似性に思いを巡らせる。 この息苦しさは彼が指摘する原型的建築特有のものであり、 生と死の緊張と不安の両義性がそこに凝縮されて経験されるかのようである。 また、 トート機関により建築されたブンカーには女性の名が付けられたという。 バルバラやカローラなど、 それは避難場所としての胎内回帰願望的欲求を示唆させるものであった。 空間の性質や外形的特徴を含め、 信仰上での胎内めぐりといったところであろうか。

この発見は、 彼の研究の基盤を形成してゆくこととなる。 つまり、ヴィリリオが21世紀に始まると唱える速度世界がもたらす「大監禁（フーコー）」の時代、身体（感覚）が拘禁された時代において、 ブンカーのみが地理の死滅をもたらす様々な驚異から我々を掩護できる唯一の構造体であると。



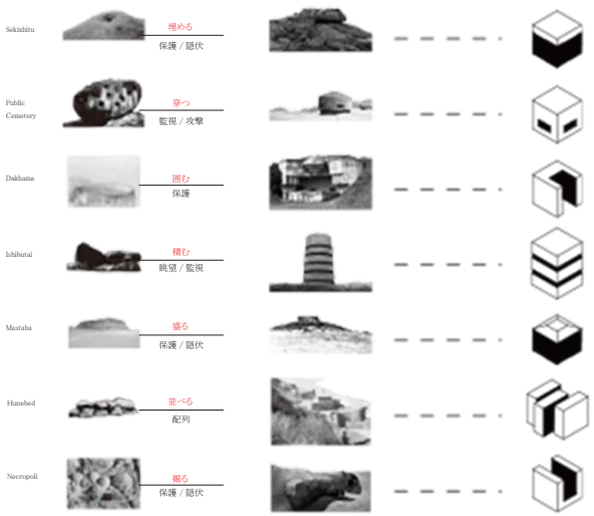
photographer, Stephan Vanfleteren

bunker type, M 262a

Phase 1-1
相似性

| AFFINITY | SEQUENCE | SITE | STRAGE |
|---|---|---|---|
| ブンカー | ブンカー・アルケオロジー<br>まえがき<br>（原体験） | 禁止と解放のエリア<br>（大西洋の壁） | 補完 → 用途に関連 |
| 埋葬のアーキタイプ | 巡礼行為 | 聖域・童場 | 聖遺物 → 信仰 |
| ↓ | ↓ | ↓ | ↓ |
| ARCHITECTURE | WALKING | FRONTIER | USE |

Phase1-2
共通性




Phase 2-1（内的圧迫感）

内的圧迫感の手掛りのひとつに胎内回帰性という人間の普遍的な回帰願望を挙げることが出来る。宗教学者の植島啓司氏は著書『聖地の想像力』の中で、聖地が位置する場所に多い特徴として、高度 800〜1200m の地点を挙げているが、これは、母胎内部で胎児が感じる気圧との近似値であることに関係しているとする。また、信仰の対象となる土地は、海に近接している場所に多いと指摘しているが、これは此岸から彼岸へと繋がる地との解釈が可能であろう。近い場所というのは、実際に潮の香りがする程に近いという意味もあるだろうが、地質学的に海であった場所や、海を臨むことが可能であった場所であるということも言うことが可能であるだろう。それは胎内から胎外を暗示し、そして、海とは正に原点への回帰を意味する象徴でもあるのだ。

Phase 2-2（外的圧迫感）

外的圧迫感は建築構造的にマッスとしての特徴を挙げることが出来そうである。その重量感や厚みは、内部の圧力とも比喩的に関係づけることが可能であろう。また、ブンカーの特徴として、監視室や銃眼を持つ眼としての壁を挙げられるが、内部から外を覗くという行為は、マスタバやエトルリアの墓所のように、内部に異界を形成し、異界の住人のために窓を設けることと直接的に近似しているように思われる。つまり、そこに対峙するということは一つには死を意味し、一つには異界との接近を意味するということであった。

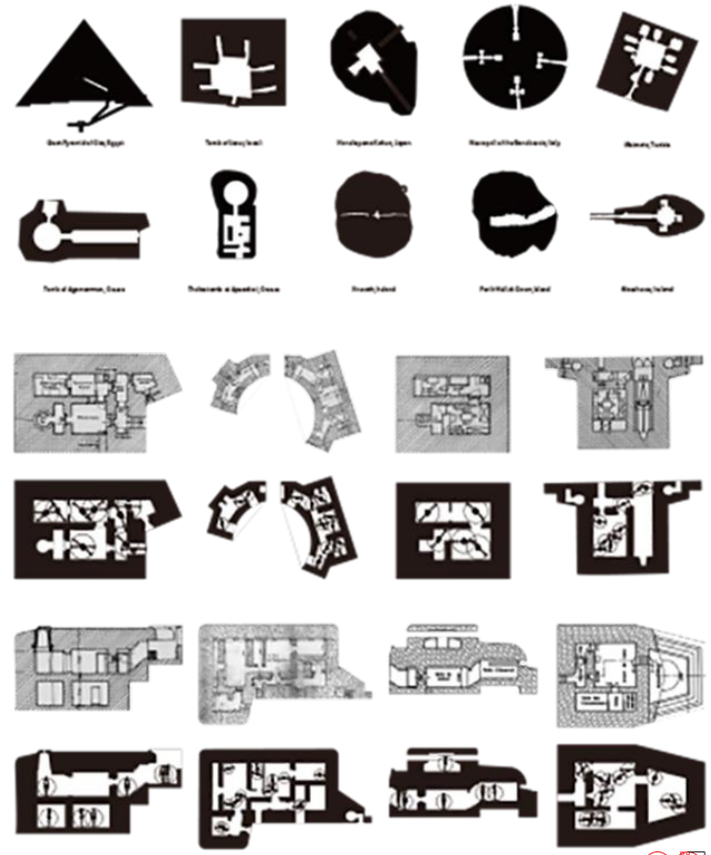
ブンカーの流線型や傾斜壁によるフォルムは、土地に対しての擬態や隠蔽性、または攻撃の衝撃の力を受けながすというような力学的な思慮が働いている。しかし、そうした合理的な配慮はブンカーに女性名を付けたという史実においても想像できるように、象徴的な意味を図らずも孕んでいたのであった。それは、ヴィリリオの指摘する「囲い込みのシンボル」でもあるだろう。

Phase 2-2
プロトタイプ

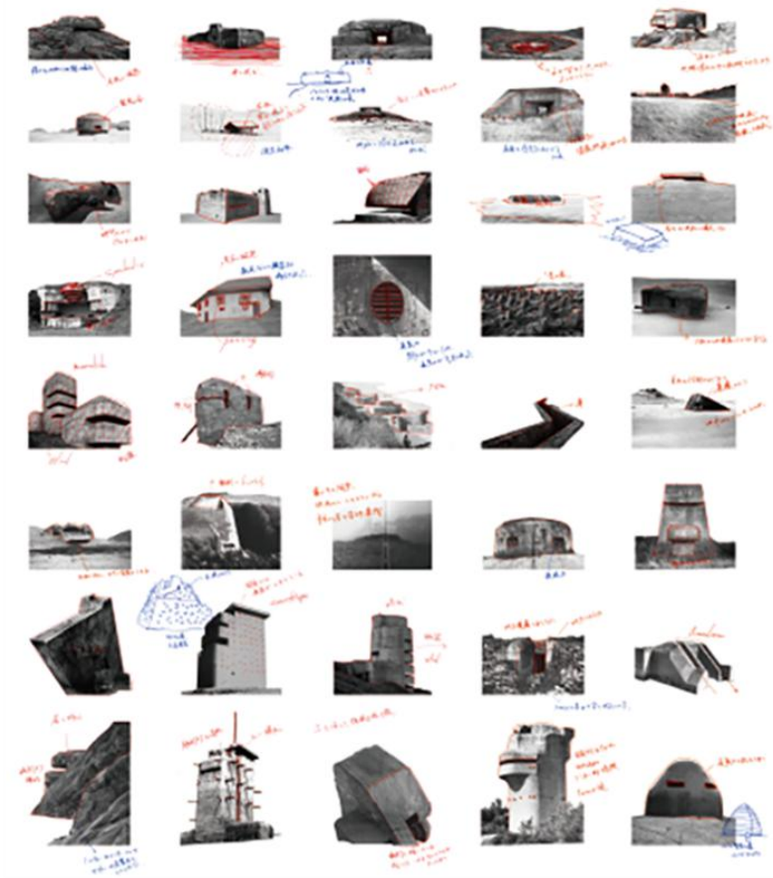
| 『ブンカー・ルケオロジー』ポール・ヴィリリオ | 第二次世界大戦 | 知的好奇心 | 立ち入り禁止エリアの解放 | ブンカー | 身体的圧迫感 | 「内的にも外的にも押しつぶされそうになる」 | 再物質化 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 『自然の数学者の手帖』ジャン・ピケ | 古代者的立場 | 数学 | サン・ピエール島 | 自然 | 植物学 | 「私の自伝は世界のそれからは不可分離されることはないであろう」 | |
| 『隠遁の思想—森行をめぐって』谷崎 昭男 | 文化人類学 | 隠遁 | 一般不可の禁域<br>世俗からの離脱 | 森林 | 隠遁世界 | 「隠遁世界はムルナの名前だったあの一つの世界である」 | |
| コング自伝：ジョアード | 物の眼 | 物質 | ボーシェヴィキの眼の家 | 内海の思い | 石一つの観察 | 「私はたしかに自然の眼の中にいた。だからが神だ。あれがまさに神 はじめ 石の眼の眼のなかにある」 | |
| 『高石廻天戦国絵巻』歴博図書 | 史実 | 戦場 | 天竺：アンチポディ | 世界征服 | 神の予言 | 「世界の一部分ではない。これがこの世界 が、で考えることのない、ひとりぼっちの眼鏡のなかに、ひとりぼっちのかの」 | |
| 『クスクーの建築』「クスクーとは？」ウィリアム | 未来の現在 | 現場 | クスクー周辺 | 聖域 | 宗教の実現をかすか 空間的現在 | 「ヒューマン文明のもっとも、ちっぽけな部分のかすかな一つ。ちっぽけなクスクーの場」 | |

| プロトタイプ | 背景 | 身体感覚 | 断絶 | 遭遇 / 発見 | 物質性 | 回復 / 回帰 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 何らかへの回帰のための空間装置へ向かう巡礼行為 | 人間生活におけ | 巡礼行為 | 辺縁 | 遭遇 | 空間体験 | 回帰の体験 / 再物質化 |

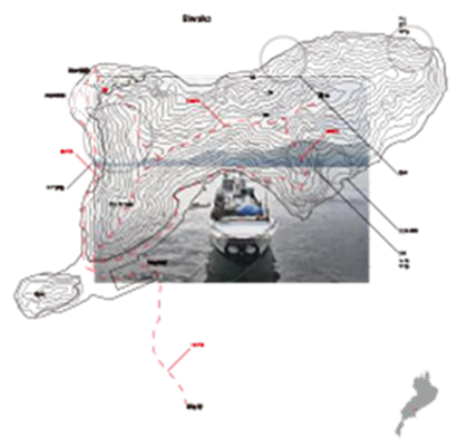
Phase 2-1（内的圧迫感）



Phase 2-1（外的圧迫感）

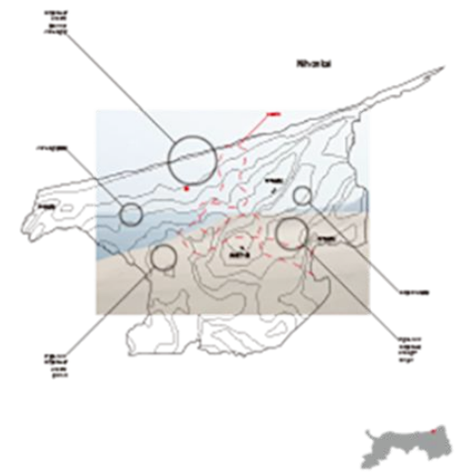


Phase 2-2
環境モデル




## 沖島

・湖に浮かぶ国内唯一の有人島
・古くは漁業と共にむ材業が盛んであったが、時代と共に衰退し、現在は写真のように石切場跡に畑が形成され、町のコミュニティを新たに形成している。




## 鳥取砂丘

砂丘地特有の動植物を有し、四季の変化によってその風景は変動しやすい

・砂丘と海との境界を持つ
・歩行の困難性
・オアシスを形成
・植生と風景の問題を昔から抱えている

## 尾瀬沼

固有の植生を形成し、国内で最も高層に位置する

高層にある唯一の沼である
・冬季には水面が凍る
・周囲には湿原地帯が形成されている
・尾瀬特有の植物が多く原生し、外部から種子が持ち込まれないよう注意

gene bank とは種子遺伝子の多様性の保全に関する機関である。ひとえに保全といえど、その形態は様々である。本設計における種子銀行の義務としては、辺境における「風景多様性」の観点から、稀有な風景の保全を目的とする。

近年では交通の便の発達により、何処へでも手軽に赴くことが可能となった。これを機能的な平面の獲得と言える。さらには、スーパーフラットという透近感を排除した概念まで登場したくらいだ。辺境とは、将来な果行きを持つだろう。しかし、観光資源となった風景は、それが枯れるまで利用され尽くされるのであろう。地理多様性、風景多様性の消滅は迫っていると言える。同時に我々の身体性の消滅も重保しているように思われる。








種子保存までの作業

参考機関としては筑波市にある農業生物資源ジーンバンクを掲げ、採集した資料を元に種子保存までのプロセスを示す。ほとんどが手作業であるが、丁寧な作業が行われている。保存庫に関しては機械解剖行を思いていたもの、世界的にみては、一つ一つの容器を手作業で管理しているところは存在しているようだ。

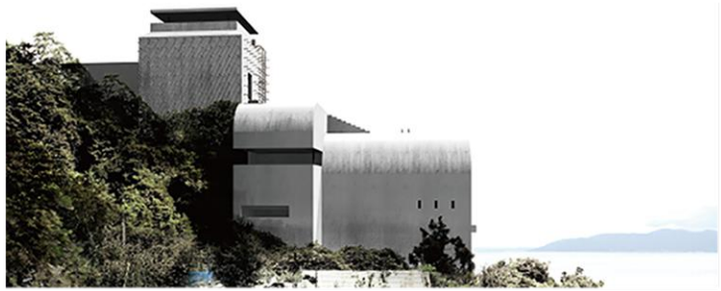
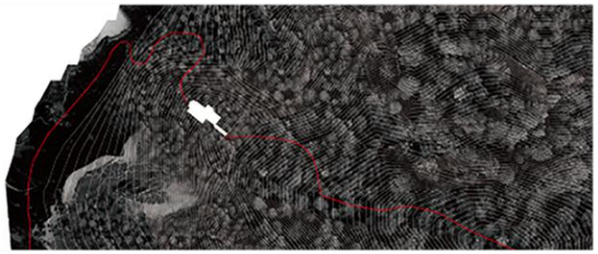
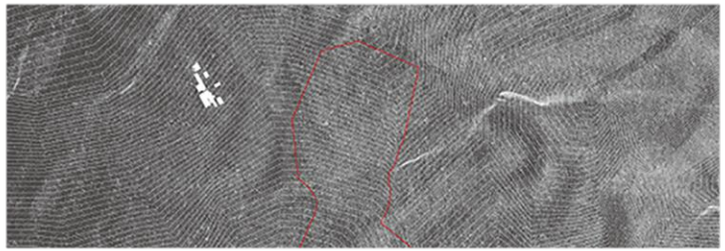
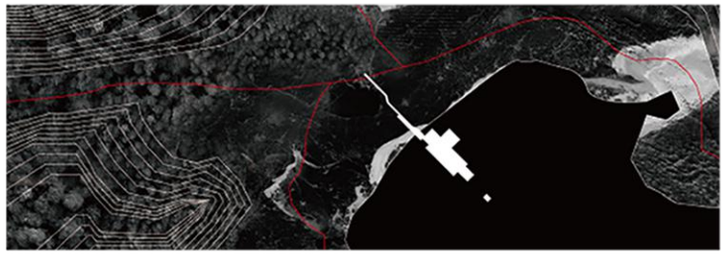
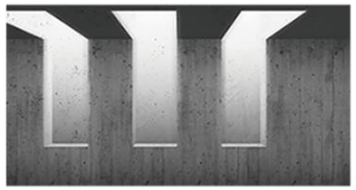
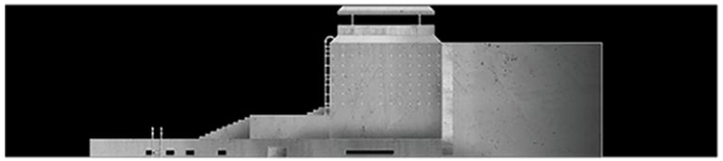
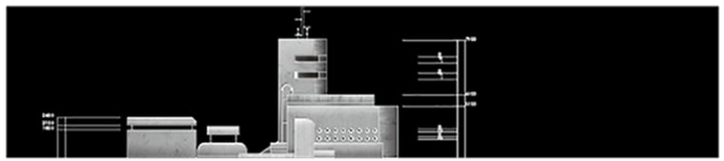
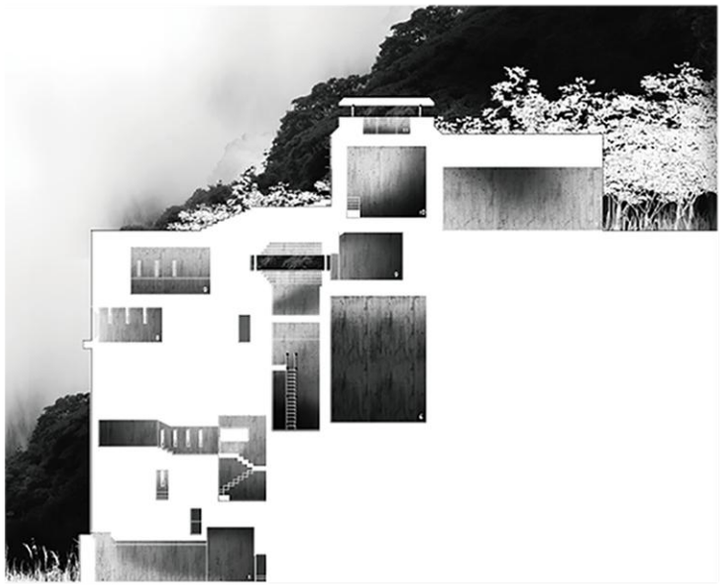
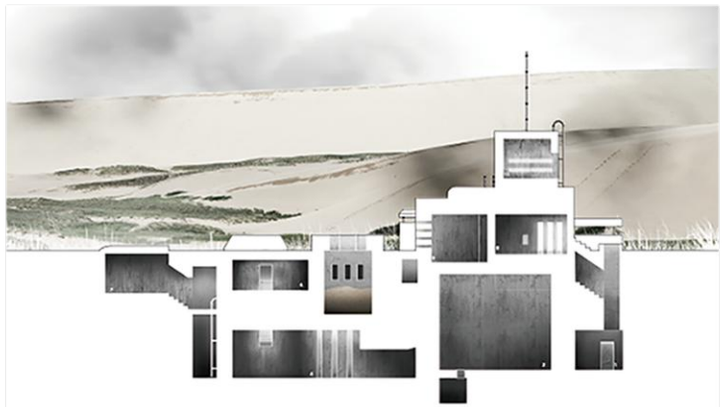
必要設定



全国の農研機構

生態系の保全に関わる機関はを地に存在している。種子の保存に関しては、8本に原生している植物のほとんどを筑波市の農研機構が保管している。



風景多様性の保存を目的とした場所

本設計では、三つの異なった環境を持つ要地を設定し、場所を位置付けた。